自閉症児の治療教育に関する研究

—fallow-up を続けた一症例—

研究第７部　　平井　信義・野田　幸江

1.　はじめに

われわれが自閉症児の治療をはじめて既に12年あまりとなる。その間、わが国における自閉症児の研究も、初期の散発的な症例報告から、医師をはじめとする研究者の興味を中心とした「自閉症の範疇」をめぐっての論争へと進み、最近では、子どもを中心とした治療教育を考える方向へと大きく変りつつある。この変化は、児童精神医学のあり方を考える時、むしろ当然の帰着というべきであり、われわれの研究も、また同じ歩みを進めてきているということができる。

その間、常にわれわれの研究に多くの示唆を与えてくれた１つの症例を、われわれは既に、著書「自閉症」及び、厚生省児童家庭局監修「児童のケースワーク事例集—第十九集—」に「長期間観察治療をつづけたケースの経過報告」として報告してきたが、それ以後の経過をここにまとめ、長い経過を追い、今、思春期を迎えている自閉症児の問題の解決に若干の考察を加えてみようと思う。

2.　症例

(a)出生より現在までの経過の概略：—(前著よりの抜萃)

M・B　男児　昭和30年出生

２才10ヶ月の時「口がきけない」（意味のある言葉がいえない）ことを主訴に来所。その時に行った乳幼児精神発達検査の結果は、ＤＱ63であり、一応テストにも応じているところから、相談担当者より「精神薄弱の可能性が強い」との診断をうけた。その後１ヶ月たち、友人関係を問題として再び相談に来所して以来、われわれが担当するケースとなった。

３才９ヶ月より、診断を目的とした週１回、１時間の観察を開始し、同時に１か月に１回母親との面接を行った。

４才９ヶ月、１年間の観察の結果、自閉症的児童として、週１回１時間の遊戯療法を始めることを決定し、爾来それを続けた。

６才８ヶ月、近所にある普通の幼稚園に入園した。

６才９ヶ月、個人療法をやめ、保育形態をとる。すなわち、入学準備のために、１才年下の自閉症を疑う男児１名と一緒に、週２回、午前10時より午後０時半までの保育を行なう。就学は、１年猶予することを決定した。

７才９ヶ月、小学校普通学級入学。それとともに週毎の治療を中止し、１学期１回母親との面接を行なう。

13才９ヶ月、普通中学１年入学、週１回の個人治療を再開した。

(b)遺伝関係ならびに既往歴

特筆すべきものなし

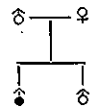
(c)検査

①脳波検査：４才７ヶ月時の所見として、r. Temporal に spike かと思われる波形が認められているが、５才時の脳波、脳のレントゲン、手根骨のレントゲン検査では、いずれも異常なしである。

②知能検査

２才10ヶ月	ＤＱ63	乳幼児精神発達検査
３才９ヶ月	52	〃
４才０ヶ月	63	〃
４才３ヶ月	74	〃
５才４ヶ月	57	〃

(d)家族構成



父は海兵卒で会社員、母は高女卒。父が30才、母が27才の時に本人が出生３年後に弟が出生している。

(e)生育史

出産は、陣痛が始まってから４日かかったが、正常分娩であった。仮死はない。出生時体重は3480ｇ。首のすわりは100日ぐらい。始歩は１才６か月でやや遅かったが、その後の発達は早く。短期間のうちに走り回るようになった。

(f)幼児期にみられた特徴

第１表参照

(g)学童期にみられた特徴

第２表参照

第1表　幼児期にみられた特徴

	0　才	1　才	2　才	3　才	4　才	5　才	6　才
くせ	自分の手をひらひらさせる	興味を持つとその事に熱中する 物を放る、穴に物を入れる 歩くコースがいつもきまっている	乗物が好きで、汽車の音で貨物、急行、客車等を区別し、1日中でもながめていた	棒で日ざしを追う どこへ行くにも気にいったものを持ちあるく 時計をほしがる テレビの時報を1日中待っている	水を異常にこわがる 並べる事を好み何でもならべる 家出、同じ時間に帰って来る 紐を持ち歩き口の中につめたり出したりする セーターの袖口をすう	ひもいじり 物を放り上げるくせが再びはじまる 鼻ほじり、指しゃぶり、動いているものに飛びつく 戸の開閉に対する執着 袖口すい、どこでもなめる	はとに興味をもつ 1日中泥んこ遊び、穴を掘る、あきると自転車オートバイを片はしからひっくり返して歩く
ことば	なし	なし	意味のない音のくみ合せのみ 要求はすべて母の手をひっぱって表現する		語い数がまし、何でも口に出していう様になる 反響言語出現	同じ言葉のくり返しが多い 「三越いった　おじいちゃんとたかちゃんといった、エレベーターのった、エスカレーターのった、また行く、おもちゃ、おもちゃ」程度のおしゃべりができる	
生活	いたずらがはげしい よくねむりよくのみ、よく太り皆に育てやすい赤ちゃんといわれた 10ケ月、ふざける事も大すきでイナイイナイバアーも上手　しかし人まねバイバイ等はぜんぜんせず	1才半歩きはじめる 童謡を好み、ラジオが始まると、それの書いてある絵本を取りに行き、みていた	排尿　自立 反応が少ないのでロウを疑う	なついていたお手伝いがいなくなった後、別の人が来たが、まったくなつかず一緒に食事をする事も拒む デパート、地下鉄、遊園地を嫌う	鳩や犬とよく遊び、古材で犬小屋を作る	近所の犬を非常にかわいがり、1日中遊んでいる しつけがくずれ、用便、洗面、着かえ等まったく人まかせとなる 気にいらない事があるとあばれたり泣きわめいたりして手もつけられなくなる。	用便、着がえ、再び自立
対人関係	他の子どもの遊びに興味を示さず	他の子どもが遊んでいてもそれに加わらず、まわりをただ歩いている	茶わんをわる等人が困っている時には必ずそばに来て大笑いをする 一度人になついても次に会った時はしらん顔している 3才のいとことだけよく遊ぶ	いとことよく遊ぶ 弟をだいて追いかけると大喜びで逃げまわる 弱い者いじめの傾向が出る	弟をいじめる マーケットで母を見失うと泣き出す	友達遊びはますます傍観的か、あるいは砂遊びをしている友達に砂を浴びせる、小さい子をつきとばす 弟をいじめるかと思うと仲良く遊ぶ 外出する時は必ず弟に同行を求める	

知的なもの				絵をかき始める ピクチャーパズルをよくする	線で絵をかき命名する 家、鳩の絵が多い 関係認識がはっきりして来る	ピクチャーパズル　40片位のをやる カレンダー、駅の名前に興味を持つ 自己流に駅名をかく絵の様な字であるが間違ってはいない	

第2表　(1)　学童期にみられた特徴（一）

	小　1　年	2　年	3　年
学校適応	○かなり畏縮している感じ ○1～2度公共の物を外へ放り出すことはあったが一応形だけは皆にまじり特別に問題なし ○袖口をかむ	○学校にもなれ本人にとっても居心地の良い一年であった ○皆の前で歌もうたうし順番に本もよむ ○授業中でも家庭と同じ調子の質問が始まる ○学校からのお知らせを忘れずに伝達できるようになる	○決められた4時までは学校にいるが、ひとりでボンヤリしている事が多い ○3学期になり学校でも家と同じようないたずらをする（髪切り、他の子のノートにいたずらがきをする）4～5時間目に多い
友達		○H君と非常に仲良くなるが、大好きであるのにもかわらず、つねったりする ○H君は絶対であり、その通りをまねる	○Hが転校してしまい独り遊びの傾向が強くなる ○よくけんかをする
学業	○どれ程理解しているのか不明 ○算数の計算が出来る程度 ○社会科→地図をかく事→表札を読む事に発展 ○社会科→道路標識に興味をもつ		○運動会の徒競争で2等をとる、水泳で25m泳ぐ（級で3人）、区の写生展に1級2点の代表にえらばれる ○興味と学業が結びついた（書取り、地図）ことから学習意欲がでる ○発表もどんどんする、成績を気にするようになり、3や2がつく ○考えようという姿勢が出る ○しかし3学期になり、まったくその気なくなる
先生との関係	○先生は神経質で口数も少なかった。	○磊落でユーモラスな先生 ○関係もよくなり、命令されればそれに従う ○先生の個人的質問にも、かなりよく答えられるようになる	○女の先生
家庭での様子	○5～6人の友人が遊びに来てくれるが遊びには加わらない	○積極的に友達の家へ遊びに行くことは出来ないが、かくれんぼや折紙などを友達と一緒にやる ○反面、ひとりになって字をかいたりカルタを作ったりする ○家でも時間割りを作り教科書を前にして坐りつづける ○入浴、散髪、買物などひとりでやりたがり手出しを嫌う ○母がおこるとおこらないでと頼む ○しばしば興奮状態になる事がある	○弟とはよく遊ぶが、同級生とはあまり遊ばない ○父とは算数や天文の事については話しあう反面非常に嫌い、父がかまうと気が狂った様にあばれる ○いとこに興味をもった事から自分にQちゃんというアダナをつける ○ひとりで買物や、プラネタリウムを見に行く

第2表(1)のつづき

興　　味	日の出、日の入り、地図道路標識 「何月何日の日ノ出は何時何分？」という質問が多い	星座、月	○旅行が好きで行く事が決まれば案内書を買い求め出かける前にはその土地についての一応の知識を持っている ○天文 ○雲→煙、ゆげ ○泥あそび……退所した様な感じ　3万もおだんご作ったらどうなる等と質問する
そ　の　他			○落ちて死んだ鳥に対し悲しみの涙を流す

第2表 (2) 学童期にみられた特徴（二）

	小　4　年	5　年	6　年
学校適応	○新学期を迎え一応落つきをとりもどす ○一応4時までは学校にいるが学習にはのっていない ○3学期になり再び問題をおこす（カーテンを切る、当番表にイタズラがき） ○理科の時間にトラブルが多い、実験器具を独占したがるため ○木曜日に多い、しかし休めというとダメという ○母がついて学校に行く	○始めよかったが1月半位後、髪を切る　友人の首をしめる、顔に爪をたてる等の行動が始まる ○先生がいないとよく事件がおきた ○2学期になり、落つき、問題をおこす事なし ○運動会などよくやる	○学校で作った地球儀を毎日もって行き4分間に1度づつ手でまわしていた
友　　達	○なぜ、いたずらしたのかときくと、友人がバカにしたからという	○1人の子どもを好きになり追いかけまわす（男の子） ○精薄の子と仲良くなり、その子によばれると運動場へ出る ○友人や先生の家に遊びに行きたがる　親より友人を受け入れていた ○2学期になり友人に対する興味まったくなくなる	
学　　業	○授業中、百科辞典を持ちこむことにより問題を解決しようと試み，ある程度成功	○書取りを好む ○2学期になり成績下る ○学習もむづかしくなり、わからなくなったという感じ	○中学問題がおこり、書取りをする様になる

先生との関係		○再び男の先生 ○先生が本人に対し警戒的 ○2学期になり先生に手離されたという感じ（問題をおこさないのでそれでよいという） ○教育研究所に出ている先生という事で親としては安心していた	
家庭での様子	○帰宅後机の前に坐っている事が多く、図鑑をみる、日記をかく、習字をする ○人に対する区別をする、本人に好意的な人しには質問をあびせ、そうでない人には戸をめたり、フスマを破いていやがらせをする ○弟とのけんかが華々しくなり恐ろしい様なつかみ合いをする ○興奮すると、みさかいがなくなる	○それまでどんなに大変でもちゃんと続けていた日記を3月8日からパタッとやめてしまう	○6月頃あばれる→秋の中端よりなくなる ○書く事が始まる〝目ダクリ〟の絵 ○中学の問題から父親がかなり本人の生活の中に入り、きびしかった ○地球儀の事から計器類を机の上にならべたり、イド・ケイドに興味をもつ ○3学期から日記をつけ始めるが、家の建設の事ばかりかく
興　　味	○泥あそび ○植物採集 ○スーパーボールは何故はずむか、アリは90度のところを歩いても、なぜすべらないのか等質問 ○カレンダーに対する興味も詳細となり、それにこる（適という暦を自分で作る）	○写真に興味を持ち、学校のクラブに入る ○オーストラリヤ ○天文、地図 ○蛙	○写真の興味なくなる ○工作用紙で家を作る（学校の3側面でマンションの建築がはじまる） ○マークをかく ○折紙で舟を折る。
そ　の　他		○臨海に連れて行ってもらえず（本人はとても行きたがっていたのに） ○1学期は問題はあったが生き生きしていた様に思う ○学校でお客様になってしまった様な感じ ○あまり家にとじこもっているので無理にプールにつれて行く	

小学校入学を機に、週1回の個人療法を中止したが、その理由は、学校側の受入れがほぼ満足すべき状態であったこと。本人自身が「愛育会へはもう行かない」といい出したこと。及び母親が非常にすぐれた受容力を持ち、われわれが当時、意図していた治療方針――専ら子どもを、受容をすることによって疎通性を高めるもの――をよく理解し、具体的な生活場面における問題の処理の仕方も極めて適切であり、母親自身に養育をまかせておいてもよいとの判断を持った事等が大きな理由であった。一方、当時ようやく自閉症児の問題がクローズアップされ始め、治療を希望とする子どもの数も多くなり、治療者側の時間的制約から本児に対し、あえて治療続行の処置がとられなかったことも一つの理由であった。

事実「学童期にみられた特徴」の表でもふれたように1、2、3年生頃の本児の適応状態は、治療の必要が感じられぬ程、よかったので、その当時、治療を中止したことについて母親も、われわれも不安を感じていなかった。しかし、結果的にみて、この時期にわれわれが積極的に接触をもたなかったことは、その間の本児の心理的な経過が不明となり、それ以後の行動との間にどのようなかかわりあいを持っているのかを、把握しがたいものにした。その間の行動の意味を発達の流れの中でとらえていたならば、その後の変化も、機に則してより的確に把握し処理できていたのではないかと思われ残念でならない。その上5～6年生時の担任教師が、教育相談に関係している先生であったところから、教師の本児に対する理解を過信しすぎたこと、及びその教師から問題の提起がなかったので、母親もその教師にまかせきっていたことが、後になって考えれば学級集団の中で問題がなかったということは、教師から問題にされなかったということでもあり、この間の空白がそれ以後の本児の生活にかなりの影響を与えてしまっているとみることができる。

(h)中学入学までの経緯

中学入学に際して、小学校の担任教師から特殊学級への進学をすすめられたのは意外であった。しかし、それに応じて、見学に行った2・3の特殊学級は、いずれもかなり職業訓練的な色彩が濃く、この時点で今までの受容的な扱いとは相反する職業訓練を実施することの是非を考えた時、特殊学級入級にはふみきれなかった。たまたま学業よりも全人格的な教育を第1の目標にしている私立中学校を知人から紹介され見学に行ったところ、本児が非常にその学校に興味を示し、入学試験の準備に書取りの勉強を始めたこともあって、そこを受験することになった。しかし結局は学力がたらず、このまま入学させることは、かえって本児のためにならないという学校の判断により、ついに入学は許可されず区域の普通中学へ入学することになった。

入学当初は、われわれが懸念した程のこともなく、喜んで通学していた。教科別の授業であるため教師の本児に対する特別の関心がなかったことが幸いしたのか、学校にもよくなじんでいる様であった。

(i)治療再開後の2・3のエピソード。

中学校進学をめぐって、母親との面接が頻繁になると、やはり、なお適応などについて問題のあることが浮きぼりにされ、本児自身に対する週1回程度の個人治療を続けていく必要のある事を痛感したので、中学校入学と同時に、本児に対する週1回の治療を再開した。

治療を再開した当初、セッションの大部分の時間は、本児がレントゲンの話をすることで終始した。すなわち「8mはなれたところから30秒間づつレントゲンを100回かけたらどうなるか？」「30m離れてレントゲン、かけたらどうなるか？」「40年に1回しかレントゲンかけないとどうなるか？」等の質問がくり返されると同時に、それ等の質問がかなりの早さで何枚も何枚も紙に書かれた。その間、治療者は、それを何らかの刺激による新しい興味の発現とみて、その興味を発展させるべく、種々の知識や材料を用意した。しかし、それ等の働きかけには一瞥を加えるだけで応ずる様子がなく、その後のセッションにおいても同じ質問がくり返された。1か月程すると、「○日に学校でレントゲンをとらないとどうなるか？」「逃げちゃうとどうなるか？」という質問に変ってきた。そのことにより本児のレントゲンへの執着は、先に治療者が考えたような知的興味から生じたものではなく、いやな事、（すなわちレントゲンをとること）を強制されることへの不安であり、その不安から逃れたいにもかかわらず、その方法を見出し得ないところからおきた異常なまでのこだわりであることに気づいた。そこで、治療者が、その点を明確にした時、レントゲンに対する機関銃のような質問はやみ、更に学校でのレントゲン撮影が終った以後はレントゲンに関する質問は、完全に消失した。この経験を通して、治療を中断していた空白の大きさを知ると同時に、自閉症児とのかかわりあいの中で、いかに多くの行き違いが生じやすいかをあらためて痛感した。不安を解消しえないでいる本児にとって、治療者の与えた刺激が、いかに見当外れのものであったか、レントゲンに関する質問のくり返しを、不安から生じたものと解釈し得ずに過した数回のセッションを思い返さずにはいられない。すなわち、知的能力の開発という点にのみ目を向け、それ以上に感情を受容し得な

かった点に問題があったのだが、あらためて自分なりの言語的表現を通じてコミュニケートしょうとする自閉症に対して、言語による治療の困難性を痛感すると同時に、一方では初期の段階においてはかなりの行き違いがあったにしろ、自分の不安をあのような言語的表現を用いて現わしていたことが了解されれば、言語を主とした精神療法も十分に可能となるものとも考えられる。しかし、レントゲンの問題が解決して以後の本児に、この経験がどれ程の影響を与えたかを考えた時、まったくそれは、その時、その場だけの経験に終り、その後の生活に何らの関連もなく、経験のつみ重ねがないような気がしてならない。治療者がうけたこの印象は、彼らの経験が断片的であり、関係認識が非常に弱いことを物語っているのであろうか。

6月に入り、本児の通学する学校が運動推進指定校であり、学校全体が運動には熱心で、各組がバレーチームを作り、チーム毎の対抗試合が盛んに行なわれていたという状況下で、本児の参加したチームが、本児がいるためいつも負けるので、本児に練習させることによって勝利を得ようとした級友が、練習のために家にいる本児をよく誘いに来た。その際、本児が練習を嫌がっていることを知っていた母親は、本児と級友との間に入って本児をかばっていたが、ある日、母親が留守の時しめておいた鍵までこわされて本児は友人達につれ出され、特訓を受けた。その事があってから2～3日後の学校において、何か直接の動機はあったらしいが、本児は級友に向って製図板をなげた。

それ以後、級友は本児を危険人物としてみるようになり、本児も通学を嫌うようになった。

この事件は、われわれが自閉症児の扱いを考える場合に考慮しなければならない多くの事を示唆しているように思う。すなわち、学級内でおきる、この種の問題も、学童期であれば、不平をいう、あるいは直接に教師に告げる等、依存的な方法で解決されたであろう。しかし、仲間意識が強くなり、自分達の力で問題を解決しようとする気持の強いこの年令の子どもとしては、級友達がとった行動は、むしろ当然であり、チーム編成の折、そこに特別の配慮を必要としない程、状態像が好転していた自閉症児でさえも、級友の行動が強い刺激になったことは、自閉症児を集団に参加させる場合、その集団の成員の側におこる変化をも十分に考慮に入れておかなければならないということであろう。

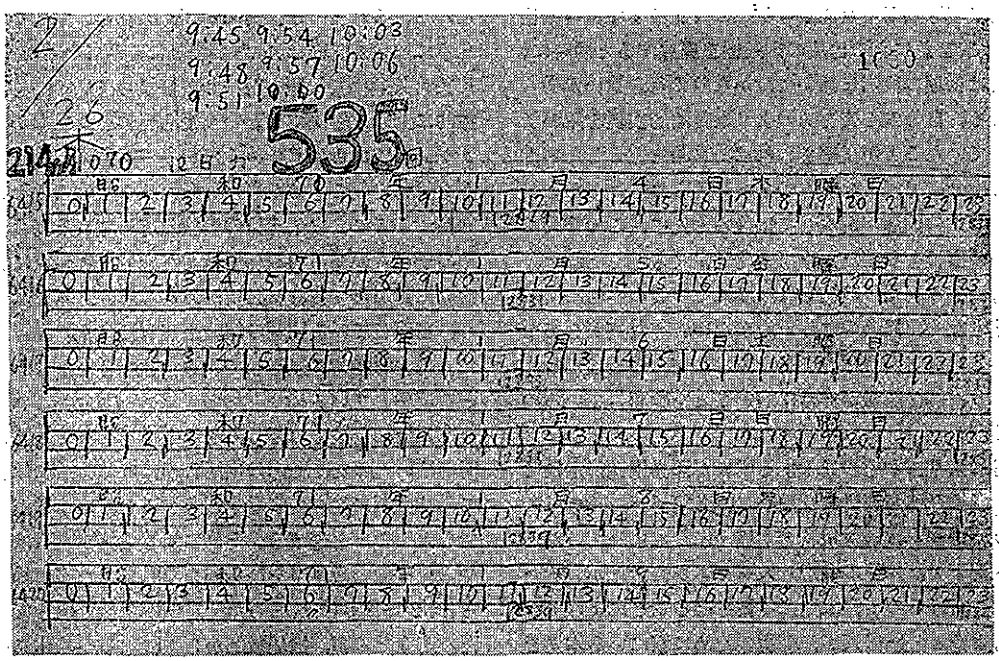
一方、このような問題がおこった時、本児が自主的に問題を解決する能力が不足していた点にも問題があるように思う。それは本児が、これまで受けて来た母親の養育態度に少なからず関係するものではないだろうか。すなわち、これまでは、常に母親が共存し、問題がおこりそうになった時には、いち早くそれをみてとった母親が、母親自身の手で問題を解決してしまっていた。この自主的に問題を解決するという生活経験を持たなかったことが、不安から生じた、こだわりの行動や、情動的に未熟な行動を起こさせたものと考えることはできないだろうか。ここに、自閉症児の治療教育を考える場合、常にその子どもの発達的輪郭を考えた上で、現時点における治療方針がたてられる必要があると思う。本児についても、当面している問題の解決を焦るあまり、発達的にみて、自主的能力の遅滞している状態を考慮しなかったことを反省している。

その後、登校を拒否し、家の中でブラブラしている生活が続いたので、一応の生活日課にけじめをつける意味で、時間割に従って家庭学習をするならば、学校を休んでもよいことを告げる。それに対して第1日目は、どうやら机に向い教科書をひらいたりしていたが、約束は破られ、2日目からは、まったく怠惰な生活に戻ってしまった。丁度その頃、担任教師からも、なるべく休ませない方がよいのではないかとの助言があり、母親は、本児の意志にかかわりなく義務教育としての学校に通わせることを決意し、本人にそれを告げた。それは、それによって、本児の要求を中心として生活させていた中に、本児の要求に反した事項を受入れさせようとした1つの試みであった。しかし本児にとって最も苦痛である学校という刺激を選んだという事が、本児を一層の不安におとしいれたようである。

本児は、その処置に対し、はじめは、朝6時頃から机の前に坐り、「なぜ学校へ行く、○月○日までは家で勉強する」等といって動こうともせず、母親がそれに相手をしていると、9時頃にはようやく腰をあげて登校するという状態であったが、母親の強硬な態度によって、1か月間のうちに登校するまでの時間はだんだんと短縮され、時には「お母さん僕、学校へ連れて行くの牛を動かすのより大変か」等といいながら登校したといい、最後には、自主的に登校するようになったが、その頃「僕は学校休むことに失敗した。なぜ失敗したのかなァ」等といっていた。又治療場面では、盛んに「何日たったら僕のことを忘れるか？」ときき、治療者が「製図板を投げたことが気になり、それを皆が忘れてくれるまで学校に行きたくないのではないか」と問うと素直にうなづくことがあった。

しかし、学業の点では、かなりの遅れがみられ、学級の中で、ただ坐っているだけという様子もみられたので、

第　1　図



登校は、図工、理科、数学等比較的本児の好む教科を中心に1日2時間位におさえた。

その後、夏休みになり、学校が休みになったことから、やや不安は減少した様子にみえたが、それはむしろ表面的であった。昨年までの夏休みは山や海に行くと生き生きとして、その変化が帰宅後も続いて、母親としても山や海に連れて行くことが楽しみであったが、今回は、そのような変化がまったくみられず、母親を失望させた。

9月の新学期を迎え、2時間づつの登校が続き、登校を拒否するような態度はまったくみられなかった。従って、登校を強制した処置は、一応成功したかにみえた。しかし果してこの強制が良かったかどうかは、なお長期にわたっての追跡の上、結論が下されなければならないであろうし、この経験が本児に何を与え得たかという点については、極めてあいまいである。

その頃は、家庭でも、治療場面でも、時間カレンダー(第1図参照)をかく事に熱中し、「12年間趣味の事をして、27才から働く」等という。その機を利用して現実に対する認識を深めさせるためにお金の話をすると、いつになく、その話に応じ「1日300円あればくらせる」というので、300円で買えるものをあげて行くと、「それなら、お金つくればいい」といって紙で1万円札を作った。その様子があまりに真剣なのだ「それなら、これでノートを買っていらっしゃい」と治療者がいうと、本児は、「売ってくれない？」ときき「ねえ、いいでしょ、いいでしょ、大丈夫だよ、4回も5回も行けば売ってくれるよネ、ネ、ネ」と反応する。ここにも、あまりにも本児中心であった過去の養育の影響をみることが出来るのではないだろうか。このお金の話をした事が、かえって本児の将来への不安を増す結果となってしまったのか、その後しばらく、「40才まで浪人してもよいか？」「8000日は長いか？」「8000日は20日が400回くればいいんだからすぐだよネ」等の質問がくり返された。しかし、その後、母親が絵の月謝を袋に入れながら、「今月は2回しか行かなかった」と独り言をいったところ「月謝もったいないか？」ときいたという。このような現実的な発言は初めてであり、お金のことを問題にしたことは、何らかの形で本児に影響を与えていることがわかった。そうなると、そのこととこれまでの治療者の働きかけの影響があいまいであったものとの差は何なのであろうか、働きかけ方の違いなのであろうか？　刺激として受け入れられやすいものと受け入れられにくいものとがあるということなのであろうか。それとも、いずれも影響を与えているにもかかわらず、それが治療者に理解されずにいるということだけなのであろうか。

1日2時間の登校が落ちついて来たので、担任教師とも相談の上3時間に延長しようとすると、本児は強硬に

反対した。家庭において母親に、「野田先生は気が違ったのかなァ、誰か2時間でいいといってくれる先生はいないかなァ」等と話していたとのことである。ここにも、現実から逃れたい、そして逃れたところで承認されるような他者とのかかわり合いの中でのみ自己を実現しようとする本児をみることができる。

その頃より、時間カレンダーにますます執着、「○日まで書いた。後3000日かく」「あきたらどうなる、あきてもあきてもやる、成人となるまで後5年、5年は長いか、短かいか？　短かいよネ、すぐ来るよネ、25年時間カレンダーかいて、40才になったら就職する。会社で雇ってくれるものネー」等という話が治療場面でくり返される。将来への不安が強く、時間カレンダーをかく事はやめたいが、やめられずにいる本児に対し、治療者として本人の感情を受容しても、それをどのように現実場面と対応させたらよいのか、解決のつかないままに学期末を迎えてしまったのである。

3. 考　　察

再開後1年間の治療を振り返ってみて、やはり第1に指摘されねばならないのは、治療の各セッションが当面の問題の処理に終ってしまい、治療者の側に、現在そこに提出されている問題を、どう理解し、この先、どう事を運んだらよいかの、はっきりした治療方針に立脚しての患者対治療者という二者の関係が成立していないということであろう。ということは、われわれにとって自閉症児はまだまだ謎の存在であるということであり、今後、彼等の精神構造解明への努力がなされなければならない事を痛感している。

果して、彼等にこれまでにある種々のパーソナリティ理論をもととした治療理論を、そのままあてはめることが出来るのであろうか。本児が自己の根底にある不安を洞察し、既成の固定化された自我概念が自己自身によって訂正され、受容することが果して出来るのであろうか。乳児期のマターナルデプリベイションの体験が、子どもに与える影響として多くの学者は、(1)現実の事物への関心と執着の乏しさ、(2)「ひと」を「もの」のように扱う態度、(3)過去の経験を現在の事態に生かすまずさ(4)未来への見通しの貧しさ等をあげているが、本児の乳児期を思いおこす時、マターナルデプリベイションの体験があるとは、考えられないにもかかわらず、本児に、それを体験した子ども達にみられると同じような特徴がみられることは非常に興味あるところであり、本児に限らず、自閉症児の治療を考える時、その子どもの現象をどう考え、その時点でどの部分の発達を促進させる事が必要か、それが全治療過程のどこにどう位置づけられるかが、常に検討されなければならないであろうし、学習理論がより積極的に治療の中にとり入れられることにより自閉症児の治療も一段とすすむと考えることは出来ないであろうか。

第2番目には、先にもふれたが幼児期から学童期にかけての終始かわらぬ受容的養育態度が問題となるであろう。自分自身とのかかわりあいの中でしか生きようとしていなかった本児に、人とのかかわり合いを教える意味で、受容的な態度は確かに必要であったであろう。しかし、それがいつまでも同じ様に彼の領域においてのかかわりあいであったために、かえって彼のその領域での発達を阻害してしまっているという事はなかったであろうか。本児の「人とのかかわり合い」は、あくまでも本児の側へひきつけての二者の関係であり、そこから出られないところに、本児の不安があり、幼児期にみせた才能の片鱗もかげをひそめてしまった原因があるのではないだろうか。そこに学童期における治療中断の空白の大きさを感ずる。

第3番目は、学校の問題である、学業には殆んどついて行けず、ただ坐っているだけの学校に行かせることの是非である。われわれとて学校へ行かせることが必ずしもよいとは考えていない。しかし、学校へ行くことからおこる不安と緊張、と行かねばならない学校へ行っていないというところからおこる不安と緊張を考えた時、本児にとっては、後者の方がより大きいようにも思えると同時に、学校を休ませる事からおこる母親の不安も大きく、本児の不安は多分に母親のこの不安が、本児に投影されているものであろうが、いずれにしても適当な教育機関のないまま、集団参加の機会を失ってしまった時の怠惰な生活をおそれ、登校を続けさせているというのが現状である。本児のみならず、すべての自閉症児にとって学校教育がどのような意味を持つのか、もっと根本的に検討されるければならない問題であろう。

Study on Therapeutic Education of Autistic Child
—A Follow-up Case—

Dept. 7　Nobuyoshi Hirai
Yukie Noda

We report the case of an autistic child whom we have continued following up from the age of 4 up to 15, and hereby we raise the following three questions:

1) In considering the therapy of autistic children, hadn't it better consider not only the existing client-centered therapy but also the therapy that takes in the learning theory?

2) Question as to the upbringing attitude that brings "acceptance" in front.

3) It is necessary to consider a fundamental counter-plan to meet the school problems of autistic children.